

最大利用客数増加を実現

シンガポールの東端にあるチャンギ国際空港は世界有数のハブ空港。現在は四つのターミナル第1〜4）が稼働している。1991年に竣工した第2ターミナルでは1回目の大規模改修工事を2006年に竹中工務店の施工で実施した。内装仕上げや預け入れ荷物搬送システムの老朽化に伴い、今回2回目となる大規模改修工事を行った。1回目には引き続き同社が施工を担当した。



シンパンゴールドカラーで統一された出発ホール

工事はチャンギ・エアポート・グループが発注。入札には他国企業を含め7社が参加し、竹中工務店が同空港での施工実績なども加味され受注に至った。同社はシンガポール

シンガポールチャンギ国際空港 ターミナル2増改修工事

(シンガポール)

で事業を始めて、24年に50周年を迎えた。チャンギ空港では78年に第1ターミナルの施工を手掛けて以降、第1〜2ターミナルや管制塔の大規模改修工事、第4ターミナルの新築工事など、大小20以上のさまざまな工事に携わってきた。

今回のプロジェクトでは、S・RC造地下1階地上6階建ての第2ターミナルのうち、延べ12万2200平方メートルを改修。併せて同1万3500平方メートルの早期預け入れ荷物格納棟も新築した。設計は内装をJHB、建築をRSP、設備をJRPが手掛けた。19年11月に竣工し、23年11月に竣工。工期中はコロナ禍に見舞われたものの、万全の感

染対策と積極的な工期短縮提案で契約工期を2カ月前倒しし49カ月での完成に至った。作業員の延べ労働時間は1260万時間で、重大労働災害ゼロを達成している。



ページの内装と緑化柱で旅の疲れを癒やす到着ホール

大規模改修では、ターミナル全体の内装仕上げや出発・到着ホールに面する外装カーテンウォールを一新。利用可能人数を増やすため、出発・到着ロビーの配置替えや手荷物受取場、トランジットホールの改修と

ともに自動チェックイン・手荷物預入れ機の配置を更新した。手荷物2300個分を保管・収容する全自動EBS（早期預け荷物保管）システムも導入。さまざまな改修の取り組みにより、第2ターミナルの最大利用客数は年間2300万人から2800万人に増加した。出発ホールは、デザインモチーフである「自然からの着想」から無限の流れを表現した3Dルーバー天井、シンパンゴールドカラーで統一された格調ある内装を施している。搭乗前の乗客をこれから始まる空の旅に誘う空間を創出した。

到着ホールは、雲を模したアルミ有孔天井やベージュで統一された内装、緑化柱などにより、空の旅から降り立った乗客が長旅の疲れを癒やし、これから始まる旅に期待を高める空間づくりにつながった。

